

第11回アクラスZOOM寺子屋「感想」

2022.5.21

難民の定義、認定の低さの理由など、私にとってわかりにくいことが多いのですが、自国で暮らすことができない人、理由もわからず国を出ることになった家族のこと、その人たちが日本でどのように学び、またどのようなサポートを受けているのか具体的に知ることができました。具体的なエピソードとそこから矢崎さんが大切だと感じていらっしゃることに強く共感しました。それは必ずしも難民支援に限らず、あらゆる日本語教育の現場に共通することだと思いました。大変よい機会になり、参加できてよかったです。ありがとうございました。

今回は、難民についての知識だけではなく、難民の方のお話を聞かせてもらったり、実際のサポートでの体験を詳しくシェアしていただき、大きな学びになりました。

とくに印象に残っている点は2つあります。まず、矢崎さんが、「その人のうちあるものが出てきやすい環境」をつくることを目指していること、決して一方的にこちらの価値観や想いを「押し付けない」、相手のことをよく見て、よく聴く。その人が今どういう状態なのか推測し、心の中に変化があれば、そのタイミングを見逃さずに声をかけをする、とおっしゃっていたことでした。私も、日本語教師云々ではなく、人として、そうありたいと思いました。

また、体験を経た後、「やりたいこと」「やれること」「やれないこと」を一緒に語り合い、その中から相互理解を深めていくという点もぜひ、学校・地域における、自分の実践のなかで取り入れていきたいと思いました。

この度は、難民支援について知るだけでなく、自分の「あり方」をふりかえる、よい機会になりました。本当にありがとうございました。

難民といっても、政府が政治的に受け入れた難民については、難民認定され、福祉や支援もあって、大変なことは多いでしょうけれど、なんとか前向きに生活ができる状況にあるとわかりました。

一方で、とにかく日本へ来てしまって、入管の収容施設で、5年、7年、10年以上と認定を待っていたり、仮放免で仕事もできない、保険にも入れない、命を落とす状況にある人もいることを思うと何とも複雑な心境になります。

身の安全、安心が一番ベースの部分で、これが成立しなければ、学びも、社会生活への参加も何もできません。同じ国のシステムで人の命の扱いの差に、モヤモヤが残ります。

日本語教育という視点では、難民への日本語支援に限らず、学習者の未来のイメージや、困っていること、一人一人が本当に求めていることやその背景への理解が、改めて大切だと思いました。支援者としての体験談や、学習者のインタビューなど貴重なお話をいただき、大変ありがたく思います。

難民について条約難民や第3国定住についてきちんと知識が整理されました。また矢崎さんの活動を通じて難民と言っても様々な背景があり、それに沿った支援の形も多様であることがわかりました。

また矢崎さんの活動は素晴らしいと思いましたが、日常の業務内容は日本語教師の枠を超えており、矢崎さんでなければできない活動のように感じました。今後後に続く日本語教師のために公的な支援も含めて持続可能な形で難民の日本語教育について整備することが急務だと感じました。

難民について、これまではグループ的な問題としての意識しか持っていませんでしたが、具体的に、一人ひとりの個人が置かれている状況や、その方々を支援されているご努力の実態を知ることができました。同時に認定から支援までに、非常に大きな課題があることの一部を理解することができたと感じています。インタビューに答えられていた方々の生きることへの強さも感じることができ、立体的な勉強ができたと感じています。心よりお礼申し上げます。

私は日本語教師をやめようと思っていました。コロナの関係で留学生が来日できず、私の職場の日本語教師は専任と担任以外が全て今春職を失いました。私は助産師の資格があったので介護の授業が残りました。同僚から日本語教師だけでは食べていけないだと弱音が聞かれました。かくも弱い立場の日本語教師という職業に疑問を感じていました。

今日のレクチャーは 驚きの連続でした。このような取り組み方があるのだと初めて知りました。福岡在住ですので日本語教師といえば大学か日本語学校かボランティア活動しかなく かなり閉鎖的で横のつながりが薄いのが現状です。日本経済大学がウクライナの学生を受け入れています。そこだけの世界にとどまっています。矢崎先生の現場に立った難民の人の心に寄り添った長年の活動を知って改めて日本語教師として何ができるのか 考え直してみたいと思いました。大変有意義な講習ありがとうございました

難民支援に関して具体的な事例などを踏まえてお話が聞けて、大変勉強になりました。

また、矢崎さんの支援に対する考え方や姿勢を伺い、今後の私自身の取り組みにもとても大切だと感じました。

その人の中から出てきやすくする環境を作り、タイミングを見逃さず、判断選択は本人に任せる、たくさんのキーワードをいただき、本当にありがとうございました。

外国人の方への支援の在り方について、改めて考えることができました。現在、在日3年目の外国人のこどもへ支援をしており、その子の人生へ良い影響が与えられればと思います。

あらためて、さぼると21と矢崎さんのスタンスや関わり方・考え方を理解することができました。自分自身の活動・実践のあり方のヒントにさせていただきます。ありがとうございました！

なんとか助けたいという気持ちがあっても、金銭面の課題が克服できなければ、その先に進まない。

企業と手を組んで学び続けられる環境を整備していくこと、奨学金制度を作っていることなど、強い思いだけでなく収支を考えた制度設計をされているということに感銘を受けました。

初めて参加しました。最近私は頑張っていなかったり、気力がない状態だったのですが、皆さんが生き生きと活動されていて、難民の皆さんも苦しさに負けないで生きているということに、大変励まされました。

助けているようで助けられて、持ちつ持たれつ良い関係が日本中で世界中で広がっていけばいいと思いました。

矢崎先生のお話、見せていただいた動画のお二方のお話、本当に心に響く言葉がたくさんありました。今一度、自分の学習者との向き合い方を見直すきっかけとなりました。その方の少し先を考える、中から出てくるものを待つ、それが出やすい環境を整える。お話を聞いて、一層、学習者に寄り添った伴走者のような日本語教師になれるよう、頑張ろうと思いました。本当にありがとうございました。

嶋田先生、矢崎先生、この度は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

私はこの仕事を始めてから主に受験生を対象とした日本語学校で教えてきたのですが、あっという間に8年も経過し、人に言われるまで気付かなかったのですが「ベテラン」と言われる域に入ったようです。

さて、最近では自身も余裕が出てきたなと思うところに、コロナ禍における留学生入管事情やウクライナ事情、また昨年より教師養成科の講師も引き受け始め、中にはボランティアで教師をされたい方や難民支援を希望する方もおり、私自身目には止まっていたましたが、手つかずにいた他方面の日本語教育の現場を経験したいと思うようになりました。

今回このWSに参加し、「寄り添う」ということがキーワードであったように思いました。

寄り添うとは、家族や近い間柄、また教師と学生の立場であっても本当に難しくもあり、これが通い合った時の気持ちよさは、心は見えずとも通い合うことができるのだと実感できます。私は「難民」という言葉はさておき、人と人がつながることに立場は関係ないように思いました。しかし、そこへ日本に来ざるを得なかった方に対し、日本語教師が支えられるのなら寄り添って行きたいと思いました。そして「寄り添い方」の入り口が今回のWSにて見えました。

養成科で勉強段階の方々には「日本文学の良さを知ってもらいたい」とか「情緒や風情を楽しめるようになってもらいたい」とか、よくおっしゃいますが、「それはこちらの希望で、本当に個人個人の要望に合わせたものでしょうか？また、それらをわかるまでにどのぐらいの学習時間が掛かると思いますか？」と聞き返します。当然答えられるはずもなく、そこでハタと気付くようです。教育は、お仕着せであってはならないと思います。これらは受験生であっても、難民の生活者であっても教師側の対応は変わらないように思います。

今回は今までにない観点からの日本語教育の現場が垣間見え、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

有意義な時間をどうもありがとうございました。あっという間の2時間でした。

日本政府のウクライナ避難民支援を機に、難民、避難民と呼ばれる方々に初めて目を向けるようになった自分が恥ずかしくなりました。チャンスがありましたら、ぜひ文化庁の「難民のための日本語教育 初任教师養成研修講座」に参加し、知識をもっと深めたいと思います。いつか「ウクライナ避難民」という言葉が人々の記憶から忘れ去られる日が来ても、「warm heart, cool head」の気持ちを忘れず、支援に携わっていけるように頑張ります！「さぼうと21」のサイトを「お気に入り」に登録して勉強させていただきます。感謝です！

さぼうと21の矢崎様、色々と分かりやすく改めて「難民」の方への日本語支援という分野をご解説していただきありがとうございます。

また今回の回に参加したことで、ウクライナから避難なさっている方への日本語支援を実際に行うことになっている、(すでにしていらっしゃる)他の方や団体の存在もあるとわかり、それだけでも勉強になりました。

難民の方への支援という部分はまだ2、3のものに少しづつしか関わったことでありませんが、今の日本の社会のこと、今までのこと、世界という大きなカテゴリーの中での一員としての日本のあり方と学ぶことはたくさんで、一つずつ丁寧に見ていっても一度では腑におちず、何度もこうやって少しずつの変化や新しい情報を足しながら日々の中に「どこかで繋がっている」ということをしっかり心に留めて行きたいと「日本語」だけに囚われず感じました。

貴重な機会を今回もありがとうございました。

嶋田先生始め、皆さまにPCの不具合でご迷惑をお掛けしまして、誠に申し訳ございませんでした。この場をお借りしてお詫び申し上げます。改めて今まで自身が 難民の方々に関する知識があまりにも不足していたことをとても恥ずかしく思うと同時に、支援という意味をはき違えていたことも痛感致しました。これからの活動の方向性に大きなヒントを頂いた、とても貴重な経験でした。

これまで自分にとってはあまり縁がないと思っていた難民のための日本語について歴史的なこともふまえたまとまったお話を伺うことができ、とても貴重な時間でした。ウクライナ難民の支援をする可能性が高いことも今回お話を聞いてみたいと思ったきっかけでしたが、実は自分の夫とその家族がかつて経済難民として日本に来たということもあり、これまで当事者から聞いていた話でしか想像できなかったことが、日本の受け入れ側のことを伺うことができ、もっと大きな絵で全体が見えたような気がしました。日本はまだまだ難民を受け入れる政策が十分ではないと思いますが、少なくとも、自分が日本語教育に携わっている上で、知っておくべき基礎知識を少し得たように思います。ありがとうございました。

文化庁の事業で難民のための日本語教師養成が行われたり、今回のウクライナからの「避難民」に対する日本語教育の担い手が名乗りでたり、世界の情勢で日本に逃れてくる人々がいるという現状は理解していても、「難民」と言われる人々の立場は様々であり、対応も多岐に渡っていることがわかった。日本語教師というだけでなく、コーディネーターとして、行政や関係団体とも協働して、難民として日本に定住するようになった人々の生活のサポートをするのは、いろいろな視点が必要であり、あるときは「線」を引かなければならないことも理解できた。

日本で「難民」である人々が在留許可を得られるのは、本当に難しく、さらに文化や習慣もずいぶん違う国で、生きて行く決心をすることは想像を遥かに越えることだと思う。そういう人々が日本にいるという現状を知り、日本語教師という専門性も活かしながら、共に生きていける日本であるために、小さな支援を重ねていければと思った。

日本における難民対応の経緯から、さぼうと21の現在の展開及び他団体の紹介、難民の方のインタビューと幅広くわかりやすくお話頂き、大変勉強になりました。現在私は都内の高度外国人材を主な対象として仕事をしていますが、難民の人たちの多くが知識人と伺い、高度外国人材と重なる部分があることに気づきました。また、ミャンマーのロヒンギャ族の人たちが、私の故郷足利の隣り街、館林に集住しているということを知り、早速その理由を調べてみました。地元貢献を意識してJETROの高度外国人材スペシャリストの業務を受託したこともあり、故郷での展開を考える上で、とても重要な視点となりました。参加者の方もとても意識が高く、各界でご活躍されている方々で、とても有意義な交流でした。事前の参加者リストや資料の配布等いろいろご配慮くださり、どうもありがとうございました。

お忙しい中、お話をしてくださりありがとうございました。矢崎さんは、同じようなお話で・・・とおっしゃっていましたが、何度聞いても、発見・気づきがあるので、何度も伺いたくなるお話なんです。考えるチャンスを提供しているのだと思っております。インタビュー映像など、なかなか見ることのできない、貴重な資料を拝見することで、難民の方々に対する知識にも実感を伴い考えることができると感じます。そして、一人ひとりがどのように関わっていったらいいのかなど、難民の方々へ思いを向けて考えてみる機会になると感じています。合わせて、矢崎さんのお話を話をうかがうことで、日本語教育に関わる者として、どのような教育観や人間力を備えて行くべきなのか、難民の方々を通して、見つめ直す機会でもあると感じています。もちろん、その分野に深く関わることで見えてくる状況や、感じられる感覚もあるのだと思います。しかし、今まで関わったことがあるとか無いとか、分野領域が違うとか、そういった違いだけに目を向けず、どのような「人」でいたいのか、自分を問い直し、成長し続けていくためにも、自分を捉え直すありがたい機会だと感じています。日本語教育は、言語能力向上に目がいきがちの部分があると思います。もちろん大事なことです。一人ひとりに寄り添って共に歩いていく姿勢は、単に、言語能力向上に目を向けているだけでは見失うものがあるのでは無いかと感じます。領域を超えてつながり合い、そして、日本語教育全体でも、共に生きていく覚悟で、日々の実践を見つめていきたいです。そして、想像し続ける姿勢を持ち続けて精進していこうと思いました。これからも、機会があるごとに、矢崎さんのお話をうかがえたら幸いです。本当にありがとうございました。

難民として来日するとしても、船か飛行機で来なければならないという関門があるとお聞きした時、難民の方たちを受け入れるために問題となっているのは日本の国の姿勢だとだけ考えていた浅はかさに気づきました。少し考えたらわかりそうなことなのに、気づかないことの恐ろしさも感じました。

矢崎先生のご自身を振り返りながらのお話にも、担当の方でさえ、新たに気づかれることがあることや、それを公にして私たちに知らせてくださる温かさ、謙虚さを感じ、その言葉と自分自身がこれまでどうだったかを反芻させられました。

カレン族のサン リモさんのお話を聞いて、BORで話せたこともよかったと思います。せっかくの機会だったので、皆さんでもっと共有できたらと思いましたが、時間的に厳しかったかもしれませんね。

いろいろ自分を振り返り、これからのことを考えるいい機会をいただけて本当にありがとうございました。

ウクライナ支援が取り上げられる中、なんとなくモヤモヤした気持ちを抱えていました。このタイミングで矢崎さんのお話を伺って本当に良かったです。

長く難民支援を続けてこられた矢崎さんのお話を聞き、寄り添う支援がとても大事だと感じました。引越してもサポート21に通うというVTRでのお話からは、地域でも信頼できる支援先ができないものかと思ってしまいました。（なかなか難しいのだな、と）

事情は違えど日本に住んでいる方たちに、自分のできることは何だろうかと、もう一度考えさせられました。

ありがとうございました！

今回の寺子屋では、難民の方々の置かれている現状をリアルに知ることができました。出身国や入国の理由などを軽々に聞けないことなども改めて再確認しました。また、インタビューでは自分の抱いていた難民への先入観とは異なり、ずっと前向きで積極的な姿勢に驚きました。「ビザより免許証」の話はとてもリアルで印象的でした。

一方、このように日本社会の中でたくましく生きていかれる方ばかりではないのではないか、という疑問も感じた次第です。「日本語教室に申し込もうとしたが、在留資格がないため、引き返してその後顔を見せなくなった」人たちはその後どうなったのかが気になります。

日本語教師としてできることは限られています、言語教育以外にしなければならないことがたくさんあるのだとも感じた次第です。

また、「一緒に街歩き」の例はすぐにも実践したく、大変参考になりました。

とにかく90分の話をお伺って、本当にいろいろなことを考えさせられました。

最後に滑り込み参加させていただき、感謝しております。

今後ともよろしく願いいたします。

遅れてすみませんでした。でも矢崎さんのお話を聞いて、今年？受けた研修の記憶が一気に浮かびました。できることから、少しずつでも始めようと思いました。今後、アドバイスを頂いたり、ご相談させていただくこともあると思いますが、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

今まで、主に留学生やビジネスパーソンなど学ぶことができる機会のある人たちに日本語を教えてきました。また、生活者の方の日本語の習得や生活支援にボランティアとして少し関わったこともあります。しかし、難民の方に接する機会はなく、今回の講座で私が今まで気付いていなかった多くのことを学びました。「日本語教師は人の人生を変える」と言う言葉が心に残っています。

これから色々なことがあると思いますが、もし、心が折れそうなことがあってもこの言葉を支えに頑張っていけると思いました。ありがとうございます。

また、何から何までお膳立てをすることだけが相手のためになるわけではないという言葉にも深く心を動かされました。

ともすれば過剰にサービスしてしまう傾向がありますが、それが相手を長期に渡って本当に活かす一助になるのか、目先の手助けだけではないのか、今一度自問したいと思います。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。